

『吾輩は猫である』を日仏二カ国語で読む  
—日本文学のフランス語翻訳における共同授業の事例の紹介—  
Lire *Je suis un chat* en français et en japonais

浅井 直子

ASAI Naoko

Association Franco-Japonaise de Nara

Nasai206@gmail.com

はじめに：開講にいたる経緯

2014年に設立20周年を迎える奈良日仏協会において、長年フランス語講座の講師としてフランス語教育に携わるオリヴィエ・ジャメ氏は、夏目漱石の翻訳者・研究者でもある。氏の翻訳による漱石の6つの講演集の出版（*Natsume Sôseki : Conférences sur le Japon de l'ère Meiji (1907-1914)*, Conférences présentées, traduites et annotées par Olivier Jamet, Hermann Éditeurs, 2013）をきっかけに、奈良日仏協会では2012年度、新たな文化講座として*Je suis un Chat* 『吾輩は猫である』を、漱石の原文とジャメ氏による仏訳を対照しながら読む講座を開講した。

1. 講座のねらい

「異文化理解」「異文化間コミュニケーション」は、外国語を学ぶ目的の大きな柱の一つであり、そのためには相手の言語や文化を受動的に学ぶばかりでなく、自分自身の文化をすすんで相手に伝えることが必要である。とはいえ、「これは日本人にしかわからないことだから、あえて言葉にしない」といったメンタリティが、時として自由闊達な異文化交流の壁になることがある。そうした先入観にとらわれずに、日本人としてのアイデンティティを大切にしながら、日本文化が凝縮された日本の文学作品を翻訳し日常会話等の話題にしていくことは、これからの日仏文化交流のために、意味のあることと思われる。

漱石の『猫』は、日本人独特の文化やユーモアがぎっしりつまった含蓄の深い作品である。とはいえ誰もがタイトルや大体の内容は知っているものの、実際にはこの小説をしっかりと読んだという人は意外に少ない。現代の読者には、漱石の日本語自体が一種の外国語のように難解に感じられる面がある。『猫』は文学作品として世界文学に位置づけられる高い価値をもち、日本語のテキスト自体が面白さをそな

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

えている。たった一つの断章の分析を通じてさえも、重要な文学テーマにひきつけて考察することができる。このような作品を、日本語の原文とフランス語訳で同時に読むことができれば、より多くの参加者の興味をひくことができると思われた。

### 2. 想定される受講者

日本のフランス語教育の一般的な枠組みは、文法、会話、購読、仏作文が基本になっている。仮に「仏作文」の延長の「翻訳」として新しいクラスを開講したならば、受講者がフランス語の上級者に限定され、少人数になってしまうことが予想された。より幅広いフランス語学習者、フランス語に自信はなくとも文学作品の読解・比較文学・異文化理解に興味をもつ学習者も受講可能になるように、本講座では翻訳テキストの作成を《到達点》とするのではなく、日仏二カ国語のテキストを《出発点》にして、日本語・日本文化・日本文学がいかんにしてフランス語に解釈されるかを理解し、テキストの「読解」「鑑賞」を深めることを主眼においた。

### 3. 年間計画

『猫』は全体で11の章から成るが、第1章に漱石の文学創造の特質が凝縮されていると思われたので、その中から8つの短い断章を選んで、各回ごとに文学テーマを一つ設定した。以下の表がその一覧である。

回	授業日	テーマ	取り上げた断章
1	4/14	「猫と人間」 Le chat et l'homme	吾輩は猫である。～ ～煙草というものである事は漸くこの頃知った。
2	5/12	「吾輩の主人」 Notre patron	吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。～ ～何とかかんとか不平を鳴らしている。
3	6/9	「観察する」 Observer	吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど～ ～まあ気を永く猫の時節を待つがよからう。
4	9/8	「写生する」 Dessiner d'après nature	「どうも甘くかけないものだね。～ ～金縁の裏にはあざけるような笑が見えた。
5	10/20	「会話」 Conversation	「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」～ ～不徳事件も実は黒から聞いたのである。
6	11/10	「日記」 Journal intime	教師といえば吾輩の主人も近頃に至っては～ ～その自惚心はなかなか抜けない。
7	1/12	「引用」 Citations	「いや時々冗談を言うと人が真に受けるので～ ～その性質が車屋の黒に似た所がある。
8	2/9	「猫の『哲学』」 « Philosophie » d'un chat	赤松の間に二、三段の紅を綴った紅葉は～ ～無名の猫で終るつもりだ。

(※これら8つの断章のジャメ氏による仏語訳は、「奈良日仏協会」のHPに掲載。 <http://www.afjn.jp/> )

#### 4. 配布資料

第1回目の授業時に、『猫』の第1章全体の原文テキストとフランス語の既訳テキスト(*Je suis un chat par Natsume Sôseki, traduit du japonais et présenté par Jean Cholley, Gallimard / Unesco, 1978*)、フランスにおける漱石の受容についての参考資料(濱田明「フランスにおける漱石の受容について」『漱石と世界文学』思文閣出版, 2009年, pp. 205-231.)を配布。毎回の授業では、次の二種類の資料を用意した。

- 1) フランス人講師によって各授業日の4~5日前に受講生に予め配布される日仏二カ国語の対訳テキスト。これにより受講生は事前に予習をして授業に臨むことができた。
- 2) 日本人講師によって授業の当日に配布される参考資料。その回の文学テーマや断章の理解を深めるための補助教材。漱石や他の作家の作品の紹介と引用・文体分析例・画像資料等をプリントアウトして提示。

#### 5. 授業内容

##### 1) 日本語とフランス語による音読

毎回授業のはじめに、受講生が日本語でその日の断章を音読。『猫』は音読を通じて魅力がいっそう増す作品であることが実感された。音読を通じて各受講生の個性が発揮され、一つの楽しみとなった。日本語の音読は、頭だけでなく心身にはたらきかけてくるように感じられる面があり、その後のフランス語学習のほどよい準備体操となった。フランス語による解説の後に、フランス人講師が仏訳テキストを音読。その日学んだフランス語の表現を復習する助けとなった。

##### 2) 日本語による解説

日本人講師は、その回のテーマに基づいて準備した配布資料を参照しながら、日本語で解説。その日の断章に関連する漱石の伝記事実・日記・小文・批評・講演や、漱石や他の作家の作品の一部を提示してテーマを掘り下げる。断章のテキスト分析を試みて、文体の特徴や文の組立て方から引き出される特性を指摘する。比較文学の視点から、漱石と他の作家(ex. マルセル・プルースト)の作品の共通点を探る。

あらかじめ日本語でテキストの背景や要点をおさえることは、次のフランス語による解説を理解する助けとなった。時間の目安は日本語での音読を含めて約30分。

##### 3) フランス語によるテキスト解説

フランス人講師は、受講者が一文ずつ日本語で音読した文に対して、フランス語で懇切丁寧な解説を加えていく。翻訳にあたってなぜその語や表現を選んだのか、一つ一つの言葉の含意やニュアンスを説明し、他に可能な訳例を提示する。時には既訳との違いを説明する。

例えば、タイトルの『吾輩は猫である』は、既訳では *Je suis un chat* であるが、ジャメ氏はあえて *Nous sommes Messire le Chat* という訳を提示した。単なる「私」ではない「吾輩」という日本語に留意して、上からの目線を含意する *Messire* (「閣下」「殿下」「先生」など、高位者を指す時に用いられる尊称) というフランス語の

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

使い方を解説し、受講生の興味をひいた。

全体として、漱石の辛辣でありながらユーモアを含んだ批評眼が浮き彫りにされるような訳と解説がなされ、受講生は漱石の文学の根本にある特性をよく理解することができた。時間の目安は、フランス語での音読と質疑応答を含めて約90分。

### 4) 質疑応答

受講生からは、フランス人講師の解説の途中または終わりに質問やコメントをする。講師が答えたり、受講者同士で答えを考えることもあった。フランス人講師の方から、漱石の原文をどう解釈するべきか受講生の意見を聞いて、訳を修正することもあった。

質問は、フランス語でできる受講生はフランス語で、フランス語を躊躇する受講生は日本語で話し日本人講師が通訳した。コメントの内容は、翻訳の仕方など言語に関わることでなく、日仏の文化背景や時代状況の違いなど多岐にわたり、はじめに読んだ時には気づけなかったような発見があり、読解の楽しさを味わうことができた。例えば、以下のようなコメントがあった。

- ①「書生」を「un étudiant servant dans une famille」と簡略に訳して地の文に入れるか、別に註釈を設けて「Étudiant qui résidait chez un professeur et s'occupait de divers travaux dans la maison en échange de sa pension et de l'instruction qu'il recevait.」と詳しく説明するか、異なる翻訳の方法があることは興味深い。
- ②「第一毛を以て裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉缶だ」*« Ce visage, qui n'aurait dû être orné que par des poils, était complètement lisse comme une tête de chauve. »*のように、比喩を訳すに際して訳者の創意工夫がいることが興味深い。
- ③「放蕩」*« libertinage »*や「通人」*« un homme qui fréquenterait le demi-monde »*について、日本とフランスにおける概念や文化の違いだけでなく、日本においても明治時代と現代とでは、社会の受容の仕方に違いがある。

質問はどんな種類のことであれ気軽に話せるようなクラスの雰囲気が必要で、はじめは質問するタイミングに戸惑いがみられたが、徐々に受講生は質問することに慣れてきた。

### 6. 共同授業のメリット

日本人講師とフランス人講師の共同授業という形体が本講座の特徴であり、両講師の連携が大切である。とはいえ、毎授業前に綿密に解説内容の打ち合わせをするわけではない。一回の授業でごく短い断章を精読するので、各自で準備すればおのずから要点は絞られてくる。むしろ年度のはじめの打ち合わせで、テキストにどんなテーマでどの断章を選ぶかが大事な作業となる。

日本人講師によるテーマ解説と、フランス人講師によるエクスプリカシオン・ド・テキストの二段がまえのアプローチによって、同じ断章について異なる角度からの分析がなされる。両講師はそれぞれの持ち味を発揮すればよい。互いの解説の途中で、コメントを加えて話題を敷衍すれば、興味はいっそう広がる。

受講者は日本語とフランス語の双方向からの読解によって、翻訳が単なる言葉の

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

言い換えではなく、テキストの背後にある文化や心性の翻訳であることを理解しながら、テキストの読解を深めることができる。日本人とフランス人の視点が重なりあいつつ、ずれが見出されることで、読解の面白さが増す。日本語で読んでいた時には無意識だったテキストの含意や自文化の特性に、意識的になった面もある。

### 7. 反省点

クラスには通訳の必要がある受講者とない受講者とが混ざっているため、日本人講師はフランス人講師のフランス語の解説を日本語に訳すタイミングに、つねに配慮する必要がある。フランス語での議論が盛り上がった時、通訳し忘れることがあった。内容が盛り沢山すぎて、2時間の授業時間では足りないことがあった。一回の授業で扱うテキストの長さに留意し、音読・解説・質疑応答の時間の配分をバランスよくとることが大切である。

### 8. 実践と応用

2013年度は『虞美人草』に着手し、2014年度は漱石の『日記』を取り上げて、継続する予定。いずれもまだ仏訳のなされていない作品なので、やりがいは大きい。現在ガリマール社のプレイアード版には、日本人作家としては谷崎潤一郎しか入っていない。過去に漱石の版が出されるという話もあったが、立ち消えになってしまった。たとえプレイアード版として出版されなくとも、できるだけ多くのフランス人の読者に漱石が読まれることには、文化的意義がある。時代は変わっても、「国民文学」として愛された漱石の文学世界が海外で親しまれることは、漱石を通じて日本的なユーモアや日本文化が理解される窓口が開かれ、これからの日仏の文化交流をより豊かにするものと思われる。

漱石以外の作家の作品についても、同様の試みは可能である。本講座では講師自身が翻訳者であったが、たとえ翻訳者ではなくても、フランス人講師が関心をもっている日本の文学作品の既訳を使用して、自身の持ち味を生かした解説を行えば、興味深い授業となるだろう。「エクスプリカシオン・ド・テキスト」は、フランス文学における伝統的な教育方法であり、たった一つの単語や断章の分析を通じて、作品全体を見わたす議論を展開することができる。日本人講師がこの手法の活用に協力することによって、日本語とフランス語の二つの言語の間に存在する隔たりを往復する実践となる。

本講座は、奈良日仏協会の文化講座として開講され、各回10～15名の受講者は全員社会人であった。大学においても、こうした日本人とフランス人が共同して行なう授業形体が取り入れられれば、新たなフランス語教育の実践となるだろう。